

2 教育山形「さんさん」プランを活かした授業改善のポイント

「探究型学習」推進協力校における “教育山形「さんさん」プラン”を活かした「探究型学習」のポイント 村山教育事務所

1 はじめに

本年度で15年目を迎えた“教育山形「さんさん」プラン”を活用し、管内各学校では、確かな学力の育成を目指して様々な取組や実践がなされている。平成28年度からは、「探究型学習」が県内のすべての学校において推進されており、管内においても、初年度であるにもかかわらず、積極的且つ具体的な取組が多数見られた。

本プランの推進を通じた学校教育の一層の充実を図るために、8月に県教育庁義務教育課、村山教育事務所、管内各市町教育委員会等の指導主事等による“教育山形「さんさん」プラン”推進ワーキンググループを開催し、情報交換及び協議を行った。そこでは、学校や学級が落ち着くことで学力が向上するのは間違いのないことであり、本プランの効果は生徒指導の面にも着実に表れていること、今後は「教科の学習がわかる」児童生徒の割合が増えるように、学習指導の更なる充実に向けた本プランの活用の具体について検討する必要がある、「探究型学習」の授業づくりの視点は改善のポイントとなると考えられることなどが話し合われた。「探究型学習」推進をさらに確かなものにすることを確認し合ったところである。

2 村山管内「探究型学習」推進協力校の公開授業における実践から

管内では、「探究型学習」推進協力校6校が昨年度より「探究型学習」の授業づくりに取り組みしており、2年目となる秋の公開授業では、児童生徒が探究的に学ぶ姿が見られ、育成を目指す資質・能力が着実に育まれていることが明らかになった。

山形市立第三小学校：「ともに学び、豊かなくらしをつくる子どもの育成」

～ 子ども理解から進める探究型学習（8年次）～

【3年 算数 「はしたの大きさの表し方を考えよう 『分数』」】

本時は、 $\frac{2}{10}L + \frac{3}{10}L$ の答えが $\frac{5}{10}L$ になる理由を、単位分数のいくつ分かという点から考え、説明していく学習であった。児童は、ノートの図に説明を書き込んだり、友達と考えを交流したりしていた。一方の児童が考えながら表出する言葉をもう一方の児童がよく聞いて、「いいんだよ。」などと声をかけ、協働的な学びを通して単位分数のいくつ分かという点に帰着しながら考えを確かにしていく姿が見られた。

河北町立谷地中部小学校：「自ら学び共に伸びようとする子どもを育てる」

～ 「わかりたい」「かかわりたい」を持続させる探究型の授業づくり（2年次）～

【4年 国語 「新美南吉の世界に親しもう 『ごんぎつね』」】

これまでの「物語を読み、感想を述べ合う」などの学習を通じて培ってきた児童の読書への意欲をさらに高めるために、「ごんぎつね」の作者である新美南吉の他の様々な作品を読み、「自分がとらえた主人公の気持ちの変化の中から紹介したい場面」を紹介する言語活動を中心に据えた実践がなされた。公開授業では、気持ちはどのように変化したのか、なぜそのように読んだのかについて、叙述をもとに考えを述べ合う児童の姿が見られた。

**村山市立橋岡小学校：「人・もの・自分とかかわり 学ぶ楽しさを実感する子どもの育成」
～探究的な学びを生む指導の工夫～**

【2年 算数 「かけ算の名人になろう」 『かけ算のきまり』】

学級の友達33名でバスに乗って出かける際の座り方を考える活動を通して、「33」をかけ算で表すことができるようになることをねらいとした授業であった。バスの座席は左2列右3列となっており、児童は具体的操作を伴った算数的活動を通して、2の段と3の段の九九を用いて「33」をかけ算の式で表していた。後半は、座席が2列、3列、4列の飛行機に乗る場合の座り方を考え、かけ算を使った表し方についての考えを深めた。

山形市立第五中学校：「確かな学びの育成」（4年次）～言語活動等を通して～

【3年 数学 「図形の面積比を求めよう」 『相似な図形』】

「図形」領域の指導で大切な、「図形に対する直感や洞察の能力」「数学的な推論の理解と論理的に表現する能力」を伸ばすことを大切にされた授業であった。生徒が、自分で選んだ2つの図形の面積比を考え、根拠を示しながら友達と説明し合う姿が見られた。継続的に取り組んでいる振り返りの場面では、「3つの図形の面積比について考えてみたい」などと、生徒の次時への課題意識が醸成されていることがうかがえる表現がなされていた。

**河北町立河北中学校：「自ら学ぶ意欲を高め、生き生きと学び合う生徒の育成」
～ 主体的・協働的な学びのある授業を通して ～**

【2年 外国語 『Presentation 2 町紹介』】

単元の学習課題として「インターネットサイト Trip Adviser に英語で河北町のロコミ情報を書こう」を設定し、導入となる本時は、ロコミに書くべきトピックを読み取る活動をジグソー法を用いて行っていた。生徒は、実際に投稿された東京の観光地についての英文のロコミ情報をトピックごとに分担し、協働的に読み取っていた。友達のつぶやきについて、どこにどのように書いてあるのかをグループ全員で探すなどの姿が見られた。

**村山市立橋岡中学校：「確かな学びをつくる授業の工夫」
～ アクティブ・ラーナーの育成をめざして ～**

【2年 理科 「回路と電流・電圧」 『電流とその利用』】

生徒の日常との関連を図り、「ブレーカーがあるのはなぜだろう」という単元の学習課題を設定していた。前時で「家庭の配線が並列つなぎになっている良い点や危険な点は何だろう」について自分達で仮説を立て、本時ではモーターやオルゴールを用いた実験を演示しながら仮説の正しさを表現する姿が見られた。機器の測定値を示しながら友達に説明するなど、科学的根拠に基づいた思考・判断・表現がなされていた。

平成29年度は、推進協力校の研究実践が3年目（最終年度）を迎える。村山教育事務所としても、本事業の2年間の成果と課題を踏まえ、当該校の研究推進及び授業づくりを全面的に支援し、その成果を全県に発信していくようにする。

“教育山形「さんさん」プラン”を活かした「探究型学習」のポイント 最上教育事務所

1 最上地区の取組について

“教育山形「さんさん」プラン”で実現している
“少人数のよさ”を活かした授業こそ、本県が推進する「探究型学習」であるという認識を共有してきた。

各学校においては、この「探究型学習」をイメージした学校研究テーマを掲げ、鋭意、日常の授業実践に取り組んでいただいている中、当教育事務所では、今年度もさまざまな取組を通じて、より明確に授業改善のポイントを示すことができるように努めてきた。

ここでは、特に、モデル単元として発信した「もがみ授業づくりワークショップ：小学校算数」の提案授業をもとに協議を行った“教育山形「さんさん」プラン”推進ワーキンググループにおける確認事項をまとめてみる。

平成28年度
もがみ授業づくりWS授業研究会（小学校算数）
兼 教育山形「さんさん」プラン推進WG

◆期日：平成28年10月13日（木）
◆場所：新庄市立新庄小学校

< 日程 >

I 開会行事	13:30~
最上教育事務所挨拶・趣意確認	
II 研究協議①	13:35~14:05
協議題 少人数のよさを活かした授業づくりとは？	
III 授業参観	14:10~14:55
第6学年3組 単元名「速さの表し方を考えよう」	授業者 鈴木 愛 教諭
V 研究協議②	15:05~15:45
協議題 少人数のよさ・本日の授業授業を踏まえて	
IV 指導・助言	15:45~16:45
「思考力を高める単元づくりのポイント」 山形大学 大澤 弘典 教授	
VI 閉会行事	16:45~17:00

—最上教育事務所—

2 授業改善の具体的ポイント

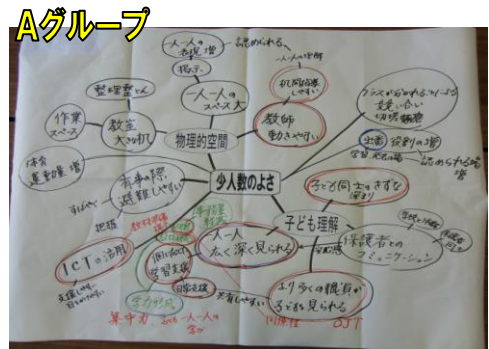
(1) ウェビングによるグループ協議より

授業に先立ち、「少人数のよさ”を活かした授業づくり”について、ワーキングメンバーによるウェビングを行った結果が、右のシートである。

まず、“少人数のよさ”を、二つの視点から見つめ直すことを確認して、ウェビングを行った。

一つ目は、「物理的空間」である。ここでは、教室空間に生まれるゆとりを、どのように“授業づくり”に反映できるのかという新鮮な議論が展開され、改めて、多人数単学級で現存する40人近い学級の物理的な不便さが話題となった。

二つ目は、「子ども理解」である。教師による講義・説明型の授業ではなく、子どもが主役となる授業づくりをめざすために、不可欠な視点であることが、議論を通じて再確認された。“少人数”であるからこそ、子ども一人ひとりの深い理解が可能となり、その結果を、個々の思いに寄り添った授業コーディネートにつなげていくという道筋が、明確なものとなった。



(2) 授業参観を踏まえた協議より

上記協議内容を踏まえ、ワーキングメンバー全員で、提案授業を参観した。

新庄小学校 第6学年3組 算数
単元名「速さの表し方を考えよう」
授業者 鈴木 愛 教諭

協議を通して確認された提案授業のポイントは、以下の通りである。

□授業形態から —ICTを活用した「主体的・協働的な学び」の具現化—

- ・物理的空間を活用した4人グループによる深い思考が展開されていた。
- ・グループ毎にタブレットPCが用意され、ノートに記された子どもの思考過程を映像で共有できる工夫が取り入れられていた。

□子どもの姿から —一人ひとりの存在感と学力形成の保障—

- ・4人グループによる学び合いが身についており、主体的にかかわり合いながら学習に参加する姿が見られた。
- ・子ども同士の円滑な関係性(絆)を基盤として、本時のねらいに沿って、真剣に学び合う姿が見られた。
- ・個々の子どもの発言やつぶやきがグループの中で共有されており、一人ひとりの存在感や有用感につながっていた。

□指導者の姿から —深い子ども理解に基づく学習の深まり—

- ・多くの参観者が教室を埋め尽くす状況であったが、授業者がグループ間を自由に動き回りながら、個々の子どもの学びを把握する姿が見られた。
- ・個々の学びの把握が、学習の深まりをめざす授業者の発問につながっていた。
- ・深い子ども理解に基づく丁寧できめ細やかな学習指導(教材準備、個へのかかわり等)が展開されていた。
- ・適応問題による確実な評価や学ぶ意欲を高める振り返りを通じて、1時間の授業を責任をもって見届けようとする授業者の姿が見られた。

□その他 —授業づくりに反映された同僚性の高まり—

- ・授業者の深い教材研究に裏打ちされた問題及び課題設定であった。
- ・授業者を支えて授業づくりに取り組む学年担任団の協力体制が感じ取れた。
- ・複数の教員で子どもを見守るよさが、授業に表れていた。

なお、「その他」に記した“同僚性の高まり”については、多忙化に拍車がかかっている学校現場にあっては、実に貴重な成果であると感じている。こうした複数の教員による教材研究の深化がなければ、真の「探究型学習」は実現されないと考えるからである。ここにも、学級事務等の物理的な軽減を生む“少人数のよさ”が、現れていることが確認されたところである。

3 今後へ向けて ～“深い学び”をめざして～

ここまで記したように、本地区では“教育山形「さんさん」プラン”による“少人数のよさ”を活かした「主体的・協働的な学び」を中核にした授業づくりが、確実に広がってきている。今後は、この方向性を維持するとともに、確かな学力の定着を実現するため、授業づくりのポイントとして、次の2点を確認している。

確かな力を具体化する教材研究の深化

- ・専門性を高める研修機会！
- ・教材分析や解釈に関する議論！
- ・授業構想の事前検討！＝評価基準の明確化

学びをつなぐ子ども理解の深化

- ・個性やわからなさの受容！
- ・思考や心の動きの察知！
- ・全体と個の把握！



“教育山形「さんさん」プラン”を活かした授業改善のポイント

置賜教育事務所

1 はじめに

“教育山形「さんさん」プラン”の目的は、「少人数学級編制を活かしたきめ細やかな指導の充実により個の能力を最大限に伸ばし、『わかる授業』『いじめや不登校のない楽しい学校』をめざす”ことである。

今年度も、人的環境の整備を活かし、学力向上、良好な人間関係づくり、いじめ・不登校の未然防止に成果をあげた学校が数多く見られた。

また、今年度からは「教育マイスター制度」が新たに始まり、マイスターを中心とした校内での研修を充実させることで、より実効性の高い授業改善が図られている。

各校での取組の成果等を以下に紹介する。

2 各施策に関する取組について（○成果，▲課題）

少人数指導教員（置賜管内は小学校のみ）

○児童の思考に応じて少人数のグループに分かれたり、習熟度別や希望コース別の学習を取り入れたりすることで、児童の多様さに応じた丁寧な指導が実現した。

○良好な学級の雰囲気のもと、安心して学習に臨み、児童の主体的・協働的に学ぶ姿が見られた。

▲形式的なT Tにならないよう、児童の実態や付けたい力に応じた、より効果的なT T指導の充実に努めていきたい。

▲つまずきがあり、支援が必要な児童への対応が重視されがちだが、上位の児童にも目を向けていきたい。どの児童にも伸びを実感させられる授業を目指していく。

小学校低学年副担任制

○加配教員と担任が連携し、小学校初期において生活習慣が確立されていない児童、集団生活の適応に時間のかかる児童に対して適切なサポートが行われた。

○理解に時間がかかる児童、授業に集中できない児童に対して適切な指導を行ったことで、学級全体が落ち着き、基礎学力の向上が見られた。

▲担任との情報交換など、打ち合わせをより密に行う必要がある。また、管理職や養護教諭等を含めた、組織的な指導体制を構築していくことも重要である。

中学校別室学習指導教員

○学級復帰を長期的な目標とし、当該生徒が安心して登校できる場づくりがなされている。その落ち着いた環境で学習を行うことを通して、基礎学力の定着と向上が図られている。

○指導教員一人に任せてしまうのではなく、担任・養護教諭・スクールカウンセラー・教育相談員等との連携を図り、多角的な生徒理解が行われていた。

▲長、中期的な目標を立て、保護者や他の生徒の理解を得ながら指導に当たっていくことが重要である。特に、学級への復帰を見据えて、当該生徒と友達との関わりを絶たない手立てが必要である。

教育マイスター制度

○マイスターの示範授業の参観、マイスターとのT T、マイスターによる授業分析を行い、「探究型学習」の視点での授業づくりを行うことで、指導技術の向上が図られている。

○授業改善だけでなく、学級経営も含めた様々なO J Tが行われている。

○中学校マイスターが行う校外での研修において、先進的で優れた取組を学び、研修後に所属校への情報提供を通して、校内研究等に還元することができている。

▲教務主任や研究主任がマイスターを兼ねているケースが多く、マイスターの負担増が懸念される。○J T 支援員との連携を図りながら、取組を充実させていきたい。

“教育山形「さんさん」プラン”による少人数での指導により、担任が一人ひとりを細やかに見取ることが可能になり、個に応じた効果的な指導が実現している。さらに児童生徒が安心して学校生活を送ることができ、学級の安定にもつながっている。今後も指導を充実し、「わかる授業」「楽しい学校」を目指していきたい。

3 “教育山形「さんさん」プラン”を活かした授業改善のポイント

～管内の授業実践から～

小学6年算数「分数÷分数」の授業から…「習熟度別学習」の実践

事前にレディネステストを行い、約70人を児童の実態に応じて習熟度別に3つのクラスに分けて授業を行った。

それぞれのコースで、「教師がしっかり教え、習得させる場面」と「児童にじっくり考えさせる場面」を、児童の実態や指導計画に合わせて配分した。



- 児童の習熟度による適正な人数でのコース分けとなり、児童の実態に合わせた指導計画で単元や授業が進めることができた。
- 自分の考えを表現しやすい雰囲気が生まれ、どのコースでも学び合いが活発に行われ、思考力の高まりにつながった。
- 「分かった」「できた」という喜びを一人ひとりの児童に実感させることができた。

中学3年数学「式の展開と因数分解」の授業から…「T T 指導」の実践

四角い花壇の周りの道の面積を求める問題を3パターン準備し、求積を通してその共通点を証明する学習である。

活動にはジグソー法を取り入れ、自分が選んだ問題の求積の方法を確認してから、自分のグループで説明し、理解した内容を発信するようにした。



- 1つの学級を2人の教師が指導することで、それぞれのグループの活動の様子が把握でき、きめ細やかな支援と確実な見取りにつながった。
- ただし、あくまでも主体は生徒。基本的には見守る立場としての教師の関わりが絶妙で、どのグループも活発な交流が行われていた。
- 協調学習が繰り返し実践され、生徒自身も活動に慣れているため、安心して学習に臨むことができていた。

3 おわりに

「探究型学習」で目指す「主体的・協働的に学び、精一杯考え、表現していく」姿を丁寧に見取り、さらに次の指導や支援に活かしていくためにも、“教育山形「さんさん」プラン”による少人数指導は不可欠であると言える。

この施策のよさをどの学校も再確認し、きめ細やかな指導で、どの児童生徒にも確実に力を付ける授業を展開していくことを期待したい。我々教育事務所としても各学校・各市町教育委員会とともに学び、授業改善につなげていきたい。

“教育山形「さんさん」プラン”を活かした授業改善のポイント

庄内教育事務所

1 「探究型学習」推進協力校における実践

「探究型学習」は、児童生徒が基礎的な知識・技能の習得にとどまらず、課題解決に必要な思考力・判断力・表現力を身に付け、主体的・協働的に学習に取り組んでいく力の育成を目指すものであり、“教育山形「さんさん」プラン”に関わる少人数学級編制の良さを活かすことで、更にそのねらいに迫ることができるものと捉える。

庄内では、管内小学校2校・中学校2校より推進協力校としてご協力をいただき、「探究型学習」の推進に努めている。4校からは、今年度も多くの成果・実践を見せていただいたが、ここでは、標題にある少人数学級を活かした取組の一つとして、「協働の学び」の実践を紹介させていただく。

【グループ毎にテーマを設定し課題解決に向けた学習】

少人数学級を活かした授業の一つとして、グループでテーマを設定した課題解決学習が考えられる。総合的な学習の時間は、こういった進め方の学習を行いやすく、少人数学級により、それぞれに行き届いた教師の支援が期待できる。

推進協力校の主な実践として、地域の課題に目を向けたテーマを決め、調べ・考え・話し合いながら、「提言」として地域に発信することをゴールにした授業を見せていただいた。ゲストティーチャーを活用しながら、自分の考えを練り直し、自己の生き方を考えることに結び付く内容だった。また、他の協力校では、姉妹校に送るビデオレターの内容構成について、グループで話し合ったり、他の意見やアドバイスをもらったりしながら自分たちの構成に活かそうとする授業を見せていただいた。

いずれも多岐にわたるグループのテーマに向けた活動であるため、少人数学級を活かしながら、これに対応できる教師の支援がポイントとなる実践であった。

【協働の学びを充実させる手立て】

少人数学級編制により学習グループの数を抑えることで、それぞれに行き届いた教師の支援が期待できる。しかし、学習者である子ども自身が主体的に学んでいこうとする意欲「学びのエンジン」を持たなければ、少人数学級を活かした協働の学びの効果は十分に果たすことはできないと考える。



推進協力校では、協働の学びを充実させるため、実に様々な手立てや工夫の実践が見られた。

その一つとして、思考ツールを活かした授業である。付箋紙などに自分の考えを書くことで「考えの視覚化」を図ったり、それを移動させたりすることで「考えの分類・整理」を行っていく。子どもたちの話し合い活動をしやすくすることをねらった試みであり、小学校低学年の子どもたちでも、思考ツールを自由に使いこなしながら活発に話し合いを進めている姿が見られた。また、ジグソー活動により個の学びの必要感を高め、成就感の持てる協働の学びにつなげていく協調学習ジグソー法を取り入れた授業も多く見られるようになってきた。

ここで気を付けたいのが、これらはいくまでも主体的・協働的な学びに向けた手段であり、思考ツールやジグソー法を活用すること自体が目的ではないことである。そのため推進協力校では、単元計画や構成を重視し、付けたい力や学習のねらいを明確にしたぶれない指導を実現する授業づくりに取り組んでいる。

2 効果的なTT授業のあり方は？

～“教育山形「さんさん」プラン” 非常勤講師研修会より～

庄内では、今年度も“教育山形「さんさん」プラン”の一環として2回にわたって非常勤講師研修会を行ってきた。1回目は全体研修として、主に「探究型学習」や生徒理解に関する研修を行い、2回目は講師種別に3会場に分かれての授業研修会を実施した。

会場校として、庄内管内3つの小学校をお借りし、TTの提案授業を参観させていただき、授業や日頃の子どもへの支援のあり方などについて研修を行った。

どの学校のTTの授業も工夫されており、グループ活動を活性化させる支援のあり方、指名計画や授業展開の修正に活かすT1・T2のコミュニケーションのとり方、子どもの意欲の高まりと活躍の場を作り出すTTの連携、効率が良くしかも子どもの励みになる机間指導のあり方等、勉強になった3会場の授業研修会であった。どのクラスも多数の児童による授業ではあったが、TTのメリットを活かし、一人ひとりの学びを大切にしたい授業を見せていただいた。

授業後は、非常勤講師どうして普段の実践について話し合う機会を設け、意見交換や情報交換の場を持った。一部その内容を紹介する。

—個別の支援で、つい教え過ぎてしまっている気がするのですが—

「大切なのは、子どもたちの自力解決の確保と達成感を持たせることだと思います。」

「『教えすぎない』ということに気を付けています。」

「担任の先生とは別の視点で子どものがんばりを認め、どんどんほめることが子ども励みにもつながると思います。」

—グループ活動への入り方がよくわからないのですが—

「グループ活動では、特定の子どもを支援するというよりは、グループの子どうしでの話が活発になるようにはたらきかけることを心がけています。」

「『〇〇さんがいい考えを持っていたよ。聞いてみたら。』とか『〇〇君が困っているみたいだよ。この考えを伝えて。』とか、班の人がつながるような声かけをしています。」

—なかなか時間がとれないのですが、担任の先生との授業の打合せや情報交換について、皆さんはどうされていますか。—

「授業前の短い時間で、ごく簡単に本時の活動やねらいについて確認しています。」

「勤務体制を考えていただき、担任の先生と話ができる時間をとることができるようにしてもらっています。」

「授業での子どもの伸びや足りないところなどを付箋やファイルに記録し、それを担任の先生に渡して見てもらうことで、情報交換や共通理解を図っています。」

「配慮の必要な子に、自分のがんばりが見えるような『がんばりカード』を作って支援しています。」

参加していただいた非常勤講師の先生方は、それぞれの学校で様々な課題や悩みを持ち、日々工夫を重ねながら子どもたちの学習支援や担任の先生のサポートにあたって下さっている。今後も先生方のニーズに沿った支援のあり方を考えていきたい。